

令和3年
4月27日

病害虫発生予報 5月号

茨城県病害虫防除所

水田に農薬を使用した後は一週間止水し、
成分の流出防止や防除効果の確保に努めましょう。

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

小麦：赤かび病	1
ナシ：黒星病	1
ナシ：アブラムシ類、ナシヒメシンクイ（越冬世代～第一世代）	2
促成ピーマン：斑点病	3
半促成ピーマン：アザミウマ類	3

【その他の病害虫】

水稻、半促成ピーマン、促成トマト、促成キュウリ、夏ネギ	4
○サツマイモ基腐病に注意しましょう③	5

II. 今月の気象予報 6

(巻末資料) 病害虫発生予報の見方について

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。
茨城県病害虫防除所 Tel : 0299-45-8200
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。
<http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosi dou2/>
フェロモントラップデータ随時更新中



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

小麦

1. 赤かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か平年より少ないと予想されている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 小麦における防除適期は、開花始期～開花期（出穂期7～10日後頃）である。地域によって生育にばらつきがあるため、圃場ごとに収穫状況を確認して適期に防除を実施する。
- ② 赤かび病菌の子のう胞子の飛散好適条件は、「日最低気温10℃以上、日最高気温15℃以上の条件を満たし、湿度80%以上の日か降雨日とその翌日」である。飛散好適条件が続く場合は、1回目の薬剤散布の7～10日後に2回目の散布を行う。
- ③ 薬剤を選定する際は、収穫前日数や使用回数に十分注意する。また、2回以上散布する際は、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤を用いる。

（令和3年4月2日発表 病害虫速報 No.1 参照）

ナシ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、発病花そう率（本年値0.4%、平年値0.1%）は平年よりやや高い～高く、発生地点率（本年値30%、平年値17%）は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 花そう基部の病斑は葉や果実への伝染源となるため、見つけ次第花そうごと除去し、園外に持ち出して適切に処分する。
- ② 落葉上の子のう胞子は4～5月に降雨があるたびに飛散し、葉や果実に感染するので注意する。
- ③ 薬剤防除は、生育ステージをよく観察し、気象情報に注意して適期に確実に実施する。
- ④ 薬剤は、10a当たり300リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

(ナシ 続き)

2. アブラムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
早い	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、寄生新梢率（本年値 1.2%、平年値 1.4%）は平年並～やや高く、発生地点率（本年値 40%、平年値 26%）は平年よりやや高い。
- ② 気象予報によると、向こう 1 か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① アブラムシ類は、特に、新梢を加害する。被害を受けると葉が巻き防除しにくくなるため、初期防除を徹底する。
- ② 薬剤は、10a 当たり 300 リットルを目安に、新梢に薬液がかかるよう丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

3. ナシヒメシンクイ（越冬世代～第一世代）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
早い	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、フェロモントラップへの初誘殺時期は平年より早い。
- ② 4月下旬現在、フェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺数は、小美玉市で平年より多く、かすみがうら市で平年よりやや多く、笠間市および筑西市で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 交信かく乱剤を使用する場合は、第一世代以降の成虫を対象に5月中旬までに設置する。
- ② 薬剤散布の際は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

促成ピーマン

1. 斑点病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、発病度*（本年値 20.5、平年値 11.1）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 75%、平年値 49%）は平年よりやや高い～高い。

※発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 多湿条件で発生しやすいため、整枝、送風、換気等によりハウス内の湿度を低く保つ。
- ② 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
- ③ 罹病部はできるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ④ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑤ 天敵を使用する場合は、影響の小さい薬剤を選択する。

半促成ピーマン

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 4月下旬現在、寄生花率（本年値 90.0%、平年値 59.4%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 100%、平年値 86%）は平年並～やや高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速く、各種ウイルスを媒介するので発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ 天敵を使用する場合は、影響の小さい薬剤を選択する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
水稲	イネミズゾウムシ	発生時期：平年並 発生量：－	4月下旬現在、本田での生息数が最高に達する時期は、平年並と予測される。
ピーマン 半促成	うどんこ病	発生量：やや少ない	4月下旬現在、平年よりやや少ない発生である。
	ハダニ類	発生量：やや多い	4月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
トマト 促成	灰色かび病	発生量：平年並	4月下旬現在、平年並の発生である。
促成キュウリ	べと病	発生量：やや多い	4月下旬現在、平年よりやや多い発生である。
	灰色かび病	発生量：平年並	4月下旬現在、平年並の発生である。
	うどんこ病	発生量：やや少ない	4月下旬現在、平年よりやや少ない発生である。
夏ネギ	黒斑病	発生量：平年並 ～やや多い	4月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
	べと病		
	ネギアザミウマ	発生量：やや多い ～多い	4月下旬現在、平年よりやや多い～多い発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：平年並 ～やや多い	4月下旬現在、平年並～やや多い発生である。

サツマイモ基腐病に注意しましょう③

サツマイモが本病に感染・発病すると、栽培中、地上部の茎葉は枯死し、地下部の塊根（イモ）は腐敗していきます。また、周囲の健全な株にも病原菌が伝染するため、本病が圃場内にまん延し、大きな減収を招きます。さらに、罹病したイモの残さが圃場に残っていると次作の伝染源となります。本県では、現在のところ本病の発生を確認しておりませんが、防除が難しく被害が拡大するおそれがあることから、発生を警戒しています。

基腐病対策の基本は、①圃場に病原菌を「持ち込まない」、②病原菌を圃場で「増やさない」、③病原菌を圃場に「残さない」ことです。定植時期を迎えるにあたり、定植時や栽培中の注意すべきポイント、侵入に備えた準備事項について記載しますので、圃場への侵入防止や早期発見による適切な処理に努めてください。

【侵入防止のために】～圃場に病原菌を「持ち込まない」対策が重要です！～

- ・発生地域から種イモや苗を持ち込まないでください。
- ・自分で採苗する場合は地際から5cm以上の位置で採取してください。
- ・消毒は必ず採苗当日に行い、薬液は使用当日に調製したものを用いてください。
- ・種イモは症状が出ていなくても感染の可能性があります。苗の消毒を行うことで、発病リスクを軽減させることができるので、必ず実施し、購入苗も未消毒の場合は必ず消毒してください。

【本病の侵入に備えた準備】～侵入に備え、発病・拡大のリスクを少なくしましょう～

- ・排水の悪いほ場では発病しやすいため、明きょ設置や耕盤破碎を行います。
- ・枕畝の途中に排水溝を設置するとともに、傾斜に留意して畝を設置するなど、排水対策をしてください。
- ・他のほ場への拡散が懸念されるので、他のほ場へ行く前には農機具や長靴についた土は良く落とし、きれいに洗浄しましょう。

【早期発見のために】～病原菌を圃場で「増やさない」対策が重要です！～

- ・万が一の発生に備え、作付けほ場ごとに使用した苗を追跡できるよう、苗床の場所を記録しましょう。
- ・発生を拡大させないためには早期発見が重要です。茎葉が繁茂すると発病株の発見が困難になるため、茎葉が地上部を覆う前までの期間（発病株を見つけやすい時期）は特に、①巻葉や株の萎縮、②葉の変色（赤変・黄変）、③株元の茎の黒変 がないか圃場をよく観察しましょう。
- ・疑わしい症状が見られたら、至急、近くの地域農業改良普及センターまたは病虫害防除所にご連絡をお願いします。

（サツマイモ基腐病に注意！ 病虫害防除所 HP 掲載チラシ参照）



Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 4月24日から5月23日)

気象庁(4月22日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	30	30	40
	降水量	関東甲信全域	40	40	20
	日照時間	関東甲信全域	20	40	40

[概要]

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 4月24日(土曜日)から4月30日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率50%

<2週目の予報> 5月1日(土曜日)から5月7日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または低い確率ともに40%

<3週目から4週目の予報> 5月8日(土曜日)から5月21日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類* (FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。

病害虫発生予報の見方について

病害虫防除所では、向こう1か月の病害虫の発生を予測した病害虫発生予報を毎月下旬に発表しています。

予報の作成にあたっては、職員による圃場巡回調査やフェロモントラップ調査等の結果を過去のデータと比較し、病害虫防除員からの情報、各病害虫の発生生態や向こう1か月の気象予報等を考慮して検討しています。ここでは予報をよりよく理解していただくため、予報の見方について説明しますので参考にしてください。

【注意すべき病害虫】

向こう1か月の間に多発生が懸念され注意を要する病害虫や、例年その月に発生が問題となる病害虫について記載しています。

1. ハダニ類

[予報内容]

予報の対象地域

発生時期	発生量	発生地域
やや早い	多い	県下全域

向こう1か月間の予測を、「平年値」との対比により記載します。

平年より

「早い」(6日以上)

「やや早い」(3~5日)

「平年並」

「やや遅い」(3~5日)

「遅い」(6日以上) 等で表記します。

特定しない場合は、「-」で表記します。

向こう1か月間の予測を、「平年値」との対比により記載します。

平年より

「多い」

「やや多い」

「平年並」

「やや少ない」

「少ない」 等で表記します。

特定しない場合は、「-」で表記します。

[予報の根拠]

予報内容の根拠を記載します。圃場巡回調査やフェロモントラップ調査等の結果に基づく現在の発生状況、予想される気象条件が対象病害虫に及ぼす影響等について記載しています。

- ① ○月下旬現在、被害葉率、発生地点率ともに平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

防除を行う際に、注意すべき事項等について簡潔に記載しています。

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。

病害虫発生予報の見方について (続き)

【その他の病害虫】 「注意すべき病害虫」ほどではありませんが、例年より発生が多い等、注意を要する病害虫を記載しています。

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
促成ピーマン	斑点病	発生量：やや多い	○月下旬現在、平年よりやや多い発生である。

主に発生量の予測について記載し、「注意すべき病害虫」と同様に表記します。

現在の発生状況等を中心に記載します。その他、特記事項や防除対策について簡潔に記載する場合があります。

予報等に記載される用語例

病害虫防除所が発表する予報等の病害虫に関する情報では、いくつか特徴的な用語を使用していますので、主に記載される用語について簡単に解説します。

・発病度、被害度

調査圃場における対象病害虫の発生状況を客観的に評価するため、調査株を被害程度別に区分・集計して数値化したものです。最小値は0で最大値は100となります。

・発生地点率

圃場巡回調査で、対象病害虫の発生や被害が見られた地点（圃場）の割合です。

・平年値

過去10年間の調査データの平均値です。調査を開始してから10年が経過していない場合は、○年平均値と示します。

・フェロモントラップ

主に性フェロモンを誘引源として対象害虫を誘殺する装置です。害虫の発生状況を調査するために利用しています。

・予察灯

夜間に電球を点灯し、光に集まる虫を毎日誘殺する装置です。害虫の発生状況を調査するために利用しています。